

平成29年度 みんなで学ぶ景観まちづくり市民教室

講演演題： 美しき日本を求めて

講師：アレックス・カー氏

(東洋文化研究者、NPO 法人籠庵 (ちいおり) トラスト理事長)

日時：平成30年3月20日(火) 19時00分～20時30分

場所：サンエールかごしま 講堂



【以下講演要旨】

「美しい日本」というテーマなんですけれども、もちろん日本には一杯ありましてね、福岡の星野村の棚田(※1)、先週、世界農業遺産になった徳島県つるぎ町のそば畑(※2)とか、たくさんありますけども、人口減少、日本は年に35万人、鹿児島(市)の約半分位が1年で消えてしまう。

「限界集落」(※3)という言葉も生まれたが、この解決策として、徳島県の名頃集落(※4)では「案山子」をつくり、今はもう150体はきっと超えていると思いますね。

世界では「人口減少学」が作られ、イギリスの大学などでは博士号を取る人もいるが、人口が減る時代の波の中で、元気な地方というか、コミュニティベースを支えられるというケースは世界では結構ある。日本では「観光立国」というが、特に地方にとっては、観光は最後の救いと言えるんですね。

ヨーロッパでも人口が減りましたが、かなり元気でしっかり暮らすことができている。というのは、ゲストハウスだとか民泊、レストラン、ガロ、または若者のちょっとした、クラフトマンとかそういう人たちが集まって、結構、潤っている位ですね。残念ながら、日本での古民家は負のイメージが大きい。汚い、ぼろ、近所迷惑、壊すにもお金がかかる、どうしよう、というね、非常にマイナスなイメージがあるけど、今、世界中の人たちがそれらを買おうとしている。

※1：石垣の開墾碑では、天保年間(1830～1844)に開かれた良好な棚田で、収穫時は、水田一面の黄金の稲穂と畦一面に咲き誇る真っ赤な彼岸花とのコントラストが強い印象を与えている。

※2：2018年3月、急傾斜地での、カヤのすきこみによる土壌流出防止や、独自の農具による耕作技術等で、段々畑を作らずに急傾斜で農業を営む「徳島県にし阿波地域」(美馬市、三好市、つるぎ町、東みよし町)が、国連食糧農業機関(FAO)の『世界農業遺産(GIAHS)』に認定。

※3：中山間地域や離島を中心に、過疎化・高齢化の進行で急速に増えた集落では自治、生活道路の管理、冠婚葬祭など共同体としての機能が急速に衰え、やがて消滅に向かうとされている。

※4：標高800m。別名「天空の里」。16年前に大阪から故郷に戻った綾野月見さんは、人形1体2日間程度、洋服等は全部リサイクルで制作し始め、現在は、住民と一緒に手掛けている。



第1部

景観はね、結構最近まで、例えば「地域再生」や「まちおこし」には禁句だったと思いますね。経済発展を邪魔する、古臭い、ロマンチスト、現実的でない、夢を見る人。経済発展を目指す人や行政には「あんなものはね、逆に現実性がない！」という風に見られていたと思いますね。

これまではね、美しくしようとか、いい景観をというの、現実性がなかったんですけれども、

今は逆にね、本当に死ぬか生きるか、明るい未来があるのか暗い未来があるのかというぐらい、非常に厳しい大きな意味を持つようになってきましたね。例えばですね、公共工事ばかりやってきて、汚らしいところの50年先をちょっと頭の中で想像しましょう。Iターンの若者がくるのかね？観光客がゆっくり滞在したいと思うのかね？まず、ないと思いますので、頑張ってそういう開発はしたかもしれないけれども、きっと少しずつ、ゆっくり死んでいくしかないでしょうね。

しかし一方、きれいにした、自然を残した、古民家を直した、公共工事を出来るだけ抑えたり、デザイン的によく考えて、美しくやったところが、明るい未来があると思うんですね。

かつて、京都人が時代遅れの京町屋を何かの理由で建て直す時に、あえて、京都のありとあらゆる歴史、文化、美的感覚などをみごとに否定する訳ですね。あんな古臭い京都と関係ないんだぞ！って、近所に言いたい訳。街へのプライドがなかったですね。そういう



市民の思いに行政は結構敏感なのでね、つい色んなモニュメントとか箱モノにしてしまいます。

もう一つ、特に地方での大きな問題は「公共工事」。日本の地方都市の60年代、地方経済を守り、支えるために、どんどんインフラを作りましょう、という国の方策がありました。ま、それが一時期は成功したけれども、今度は道路、橋と、ダムはみんな作ってしまった。しかし、既に公共工事に依存してしまっているのです、永遠に作っていかなくちゃいけないんですね。

日本の公共工事は、他の先進国とは約30年前から、随分ね一、別れてしまい、今は特に著しいですね。道路を作るとかは、別にね、悪の行為ではないし、必要な場合は当然あります。しかし同じ作るなら、できるだけ周りの景観というか、自然に対する影響を少なく、地味な、いい方法がないのか？ということが、最近の先端技術となっている訳です。ドイツなどは非常に厳しくて、道路をつくるなり何を作るなり、技術士はいろんなプランを出さなければいけないですね。日本は、できるだけ奇抜！明るく！でかく！びかびかした！人を圧倒させるすごさ！それが技術だ！という風に走ってしまいましたね。

日本では、絶対逆らっちゃいけない一つのものがあるんですね。TVの水戸黄門の山場で、印籠が出されて「この御紋を知らぬか！」皆「ははー」と（土下座）しますね。今はね、ちょっとアップデートして、「不便！」「不便！」という一言で、古いまちを抹消しよう、美しい山をぺちゃんこにしよう、川を護岸にしよう。しかし、果たしてそれで観光が成り立つのかね。

例えば、日本の山が険しいからと言うんですけども、スイスでは、「予算があればもっと山道をコンクリートに作りたかった」というんじゃないで、逆ですね。工夫に工夫を重ねて、いかにこの山の輪郭を美しく見せる方法はないのか、かなりのね、技術を取り入れての作り方でしたね。

次、もう一つの問題は、電線埋設。私は、京町屋を10軒ほど直して、宿泊施設としてやってた当時ね、泊まりにきたアメリカの高校生が、朝起きて、架空電線に覆われた街路を見て「あー、インドみたいだね！」ってポロっというんですね。つまり先進国の景観ではなかった。で、実際、地中化に関しては、日本は完全に逸脱してしまったというかね、先進国の中で。

電柱、電線、そういうものを外してみるとどうなるのか、どんなにすっきりしてくるか。

個人的に残念なのが、樹ですね。美しい街路樹は非常に「まれ」。基本的に、枝落としをしていて、うちの町屋に泊まりに来たアメリカのおばさんに「日本の街路樹は恐ろしい病気に襲われたのか？」と言われたぐらいです。日本は、ほんとに美しい樹が、どんどん、年々、枝などを落とされて、樹そのものが伐採されて少なくなってきたんですね。掛け軸に書いてある『門を開いて

落ち葉が多い』。それが (かつては) 美しいということでしたね。一つのロマンス、あの匂い、あの色、本当に秋の楽しみでした。しかしこの頃は、落ち葉は汚い！早く切ってくれ！と陳情がじゃんじゃん出てくる。今の時代の掛け軸を作るとすると、『門を開いて落ち葉が汚し』(かも)。

「木の国、にっぽん」で、世界でも森林の多い国ですけれども、使える木がない。きれいな床材とか、家具材、テーブル、椅子に、杉は柔らかすぎて無理なんですね。例えば、5, 60 年前の杉林が沢山ありますけれど、二束三文。あと健康問題ね。花粉症！特に今の時期。最後には、文化問題ですね、もう、春に新緑がない。秋に紅葉がない。本当に杉しかない山が結構あります。

私は、ちなみに「公共工事反対派」ではないんですよ。特に地方はそれに依存しているから、逆に増やしてもいい位！と思っているんですけども、ただし中身ですね。ゼネコンにとってもね。道路作っても、電線地中化しても同じなので、着替えすればいい訳です。

次、看板ですね。ここまで (乱立して) くと感心しますね。「守ろう。地域の子。」って看板で、(子は) 守られているんですかね？交通安全の立て看板で交通が安全になったのか？しかし残念ながら行政は、こういうものを立てることが、社会貢献、義務と思っているみたいですね。結構皮肉なものもあって、「街をきれいに」って看板は、錆びた廃棄物ですね。神社仏閣の経営者もね、鳥居があったらね、「皆様のご多幸を心よりお祈り申し上げます」と (看板を吊り下げる)。看板が一つでは済まない。「立入禁じる」を二つも三つも。二つがシンメトリー(対称)で(いい?)。

湯布院。駅に着いたらね、由布岳というシンボルマウンテンの前に見える、大分銀行の看板が、市民団体が働きかけて、こう(小さく)なりましたね。これで、銀行のお客離れが起きたとか不況にとか、何もないんですね。つまり銀行にとっての影響はゼロ。しかし、湯布院のイメージアップになりましたね。

人気の看板スローガンは「ふれあい」で、今日はふれあいストーリーを作ってみましたね。(以下、各看板画面で、) 子供の時は「ふれあいスクール」に通って、大人になったら



「ふれあいセンター」。そこで好きな人が出て来たら、「ふれあい夕食会場」。さて、旅行に出かけましょう。「ふれあいバス」に乗って、「ふれあい通り」を走ります。「ふれあい農園」に行くと、夕方になると「ふれあいの森キャンプ場」。やっぱりお風呂入りたいんですね。「ふれあい入浴」もあって、「ふれあい車検」は取ったんだけど、帰りに「ふれあいトンネル」で、対向車と触れ合ってしまう。最後は、「ふれあい斎場」(笑)。

私はね、「何でもない魅力」があると思います。例えば、京都の町屋とか、祖谷の石垣、ちょっとした土壁、納屋。このような田んぼ。最も僕の好きな溪谷の一つ、瀬峡(※5)や、岡山のおとぎ話のような新庄村(※6)。こんなに美しいところを次の時代に伝承できるかが、今後の問題ですね。

※5：どろきょう。熊野川の上流域、紀伊半島の山深い所に位置する北山川の絶景。

※6：しんじょうそん。岡山県の西北端、人口約1000人、出雲街道の宿場街「新庄宿」で、時の面影を残す風情ある通りがある。

第2部

日本に、親ときて、54年目ですね。大学生でヒッチハイクして、鹿児島に初めて来たんですね。そして、偶然にこの祖谷(いや)と出会った訳です。もう、全く、不思議な地形で、墨絵のような、掛け軸から出てきたような、何とも言えない景色ですね。既に過疎地帯で、捨てられた茅葺の家は沢山ありましてね、自分はお金がないけれども、あちこち探し、1973年、これを38万円

(1500ドル)で買いました。「箆庵(ちいおり)」ですね。「箆」は笛、「庵」は草屋根の家という意味で、120坪。今の評価は6千円なので、僕ほど不動産でバブった人はいないかもしれない。茅は定期的に葺き替えをしないといけないけれど、初めの頃はその資金すらなくて、近くに解体される家の茅を頂いたんですね。それがもう、煤だらけで、真っ黒！結構ね、イベント性があるんですね、茅は。東京の研修生だとか、外国人観光客とか、村のじいさん、ばあさんたちに教えてもらって、手伝ってもらいます。「日本で何よりもいけないのが、不便！」という時代に、もう超不便で、有名観光地でもなく、世界遺産とかのラベルがない、ただの山。家も一軒の農家にすぎない。それでも約20年間で3万人が来て、ついにミシュランの星まで貰ってしまいました。

何でもない魅力。くねくねした、山奥に少しずつ入っていくような道路を走っていく過程は、一つのロマンで、こんな家につただけで、ほっとしますね。よく外国のお客や東京の友人たちは、日本の中で美しい田舎の紹介を求め、出会ってですね、彼らは「ハー！自分の心の故郷に戻りました！」なんていう気持ちになります。ま、冬はね、茅葺の屋根は、囲炉裏焚いてますのでね、ちょっと暖かくなって、雪が融けて軒先まで来ると、こんなすごい「つらら」が出来ます。

第3部

高齢化、人口減少化、過疎化の中で、古民家は全国で1千万程あると言われ、あと数年したら2千万を超えてしまう。私は、日本中あちこちに行っているけども、全部、ケヤキです。

こんな調子では、まちが、神社や道とかの手入れは出来なくなってきましたね。古民家は、お荷物で、腐り、朽ちていく！どうしたらいいか困る！という見方が多いんですけども、観光産業とは面白いもんで、今までの概念を覆すような要素がいくつかあって、「景観は経済性がない！」ということが逆になった、というのが一つ。あとは、ああいう家もね、逆に資源、観光資源になってしまいます。例えば、京都北部の美山(※7)は、茅葺をきれいに直して大成功しています。

それではですね、私たちの古民家の仕事を紹介します。まず小値賀(※8)。本当の、超不便の離島。しかしね、きれいなかわいい港があって、隠れキリシタンが逃げて入った場所です。丘の上の、こんなかわいい、きれいな明治時代の天主堂が残って、夢のある美しい島です。何億円もかけて、海浜公園や立派なあわび館を作ったけど、維持費が年千数百万と町のお荷物になって、人口は減っていくばかり。そしたらと、古民家をウチと組んで、8軒ほど直した訳です。

ここで一言、私たちは文化庁じゃないのでね、歴史保存をやっていません。ヨーロッパは、家の中は現代風に、きれいなトイレ、お風呂、冷暖房だとかを取り入れ、快適な生活ができるようになってきています。そういうことを目指しつつ、大事なのが目に見えない部分、床下工事、耐震工事ですね。冷暖房、照明、水回りなどを刷新しました。古民家からは道具類、箆箆だとか、沢山出てきます。きれいに洗って、直して戻すと、本当に芸術的、美術的な雰囲気になる訳です。

レストランにした「藤松家」という大きなお屋敷(※9)では、周りの感覚を残しつつ、新しい感覚を持ってきたいので、7mの銘木でこたつ式にした。小値賀の古民家に泊まりにくるお客を目当てにやったんですけども、結構、地元も宴会などに使って、人気スポットになりました。

一方、祖谷は三好市と合併されて、その三好市の落合集落(※10)には、18軒ほど、江戸時代の古民家がありましたが、数年前の写真で判るように、茅葺屋根がなくなり、青や赤の瓦とかで、斜面にあるということだけが特徴で、本来のきれいさはなくなっていました。古民家の修復では、昔のいい技術と、優れた新建材を使い分けます。ですから、屋根は茅！というのは、祖谷の歴史・文化には極めて重要なので、茅にします。しかし、軒の辺には、現代的な防水材の上に杉皮を敷くんですね。で、床下は全部ね、床暖にします。結構雪が降るのでね。祖谷の冬は寒いんです。出来上がりますと、ものすごく快適になってきました。ガラスも二重ガラスなんですね。で、こういう囲炉裏端の生活もいいけれども、やはり、座りたいので、使いやすい炊事場をつけて、朝起きてここでコーヒー飲んで。行政の仕事なのでね、年度末制度で、少しずつやって、8軒(直

すの) に約5年間かかりました。

私が最も好きなのは、この「天一方」。直す前は、この縁側の真ん前に、ドシーッと電柱がありました。何千万の投資をして、こんなものを見たい客がいるのか? ということで、四国電力と長い闘い、というか交渉ですね。結果、ちょっとだけ、動かしてもらったね。上のごちゃごちゃ色んな線を整理してもらったんですね。ですから、古民家再生というのは、ただただね、一軒の家を適当に直すだけじゃなくて、周りの景観が色んな意味で問題になる訳です。



ちなみに祖谷は春から秋は(宿泊予約が)一杯ですね。稼働率がすごく良くて、あんな不便な場所に、東京から、世界からやってくる訳です。というのは、地方のそういう美しい環境を楽しみたいんだけど、苦労はしたくない。一定のレベルの家なら、安心していただける訳です。

全国、40軒近くやってきたけれど、宇多津(※11)は、香川県の瀬戸大橋から着く場所ですが、何とか最近まで生き残った古い町が、がたがたと変わり始めていたんですね。2軒並びの江戸時代の家と大正時代の家を町が買って、私たちはそれを直して、和と洋に。和の家には、屋根裏のところにベッドを入れます。やはり、ベッドを要求する客は最近、増えていますね。もう一つ、洋には、床の間もありましたけれども板の間にします。僕、子供の頃から書が好きでね、いつも出来上がると、書いてしまう。丁度、政治家がダルマに目を描くみたいなもんで。(笑)で、書き終わったら、「ふすま」としてはめていきます。そしたらね、新しいスタイルの観光ができました。

祖谷を中心に、年に約3千人が来るわけで、お客が落とす金額を計算してみたらね、大型観光バスでやってくる他の観光地では(短時間で通過するため)約7万人来ないと稼げない、という状態ですね。逆に、滞在の中身。そういうのをこれから考えないといけないうですね。

最後に、京都で文化イベント。どこかで書かくんですね。数年前、屏風に字を書きました。先生と交代、交代で、「明珠在掌」(※12)。要は、日本はこれまでは道路を広げるわ、護岸工事をやるわ、ウエルカムホールを造るわで、看板だらけ。「まちを美しくしようよ」とかやってきたけれど、初めから掌にあった美しい、海、山、川、家。そういうものが宝物としてあるので、それをこれからどう生かすか。一番大きな課題だと思います。どうもありがとうございました。

※7: みやま。川沿いの茅葺約250棟、自然景観と調和した農村の重要伝統的建造物群保存地区。

※8: おちか。九州本土から西へ約50km離れた五島列島の北部にある島。赤砂の海岸や牛の放牧、飛鳥時代創建と伝わる神社など。小値賀町景観計画・景観条例あり。

※9: 庭からそのまま漁に出る船着き場までいけるような豪華な造りで、土間をリノベーションしたバー、純和風の個室、和風テーブル席の離れの構成。移住シェフの地元食材を使った料理。

※10: 2005年に重要伝統的建造物群保存地区。江戸中期から明治期にかけての斜面に建つ民家や石垣は、独特な工夫で歴史的価値が高く、指定を受けた中では最も急な斜面にある山村集落。

「浮生(ふしょう)」、「晴耕(せいこう)」、「雨読(うどく)」、「天一方(てんいっぽう)」、「雲外(うんがい)」、「悠居(ゆうきよ)」、「蒼天(そうてん)」等の民宿を整備。

※11: うたづ。港交易拠点で、塩田が広がる『塩のまち』、由緒ある神社仏閣や町家が、宇多津駅南に残された一帯は『古街(こまち)』。2014年、古民家2軒の『古街の家』が誕生した。

※12: みょうじゅざいしょう。禅語で、「法華経・五百弟子授記品(じゅきぼん)」では、ある貧者が裕福な親友を訪ね、歓待を受ける。親友はこの男を貧窮から救おうと思い、男が寝ているうちに価値のある「明珠」を着物の裏に縫い込むが、男はそれに気づかず、ますます貧乏になり、物乞いに身をやつします。その後、偶然再会した親友は、「ずっと宝物を肌身につけてい

ながら、気づかずに苦しんでいたとは、なんてばかげた生き方をしていたのだ」と、「明珠」を示し、言われて男はやっと気づき、心の平安を得て豊かに暮らしたという話。

質疑応答

(質問1)

看板とか、杉とか、これまで18年間そういうことを感じながら住んでいるんですけど、鹿児島観光を盛り上げるためにどうしたらいいか。古民家的な視点からも、どんなことを感じますか？

(回答1)

残念ながら、鹿児島のことは本当に知らないんですが、写真などでは、山間部、海に、素晴らしい古民家は一杯あるようなんですね。「不便」な場所でも、貴方みたいな人が、ボランティアでも、仕事人でもいいけれど、そういう家を愛して、そういう生活をしたいという人さえいればですね、絶対人がやってくる。僕でもね、鹿児島のちょっときれいな古民家に行ってみたいな、泊まってみたいなと思うんですけども、まだ見つからなくて。そういう人が多いと思いますね。

(質問2)

日本人は、「安全」でやっている印象を受けます。日本で事故があった時に、誰の責任なんだ？と。この間、東北で訴訟がありました。その辺りはどういう解決法で取り組むべきか？これは民度や権利意識にも絡むとは思いますが、考える方向、指針について質問させて頂きました。

(回答2)

確かに大問題。訴訟に対して行政はいつもピリピリしていますが、ある程度の限界があると思いますね。これからは、「安全」と「やり過ぎ」とのバランスが日本の中でどうとれていくか、今、読めないところなんですけれども、きっと安全を凶りながら、そこまで景観を壊さない方法ってあるんじゃないかと思いますね。それは例えば、車を駐車場に置いておくと安全ですが、ちゃんと動く訳。つまり、技術でもって、まあまあ安全に持ってきた訳です。ですから道路でも護岸工事でも、残念ながら今は非常に単純。安全だ、それなら山をぺちゃんこにしなきゃいけないんだな一というね、ある意味で技術という見方で見ると、十分研究していない。十分心得ていないんですね。安全を忘れちゃいけないとか、安全は大きな問題じゃないとかは言っていないんです。特に行政は、絶対こういうことは忘れちゃいけないので、それを大事にしながら、いかに美しく、景観に影響を少なく、という一つの「技術」を取り入れることが、ポイントだと思いますね。

(質問3)

まちづくり活動をする中で、残っている古民家を活かしたいと考えても、その魅力にまちの人たちとか住人が気づいてくれない、というのが悩みで、どのような形で、住民たちに、宣伝とか、活動されたのかなということをお聞きしたい。

(回答3)

それが一番の難題。まちに対するプライドがないのが全国的な問題です。解決には、まず、街歩きプログラムだとかの集いを定期的にやって、できるだけの人を取り込むという方法がありますが、反応が少し鈍いかもかもしれません。無関心は寂しい現実です。例えば、「皆さんのコンセンサスが出来たら動きましょう」と行政がいても、永遠にだめ。近所のじいちゃんたちは別に困ってないし、残念ながら、現代的な設備の施設とかは見たことないんで、古民家に一種のアレルギーがある訳ですね。嫌なんだ！逃げたい！という気持ちだけです。結論から言えば、行政なり、オーナーなりに問うしかないですね。とにかく、やっちゃおう！それしかない。祖谷の場合は、反対はしないけど、決めてやったところ、お客やお金もどんどん入ってくる。それで、後々ね、地元の人たちは、理解を示すようになりましたね。小値賀もそうです。ですから、どこでも説明会を何度も開いて、色んな人の意見を取り入れて、興味ある方はどこでも必ずいるのでね、そういうもの出来るだけ応えながら、とにかくやることをやってしまおう！というのが勝ちですね。(終)